一　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（本文の表記の一部を変えています。）

【文章Ⅰ】

このままじゃだめだよな。

便利な暮らしの中で、そんな風に思うことがある。

例えば、その便利な暮らしの裏側で起きている悲惨な出来事が「事故」や「事件」といった形で表出し、「ニュース」として報じられる時だ。

２０１３年４月、バングラデシュの首都ダッカ近郊で、８階建てのビル「ラナプラザ」が崩壊する①「事故」が起きた。コンクリートの柱はぽっきりと折れ、原型をとどめない状態にまで崩れ落ちた。がれきに埋もれ、千人を超す人たちが命を落とした。工場の中には五つの縫製工場があり、犠牲者の多くはそこで働く人たちだった。

「事故」とカギ括弧付きで書いたのには、理由がある。ビルが崩壊した原因は、地震や爆発ではなかった。ビルは違法に建て増しされていた疑いがあり、壁にひびが見つかったため、地元警察が前日、待避を要請していた。だが、工場経営者らは②ソウギョウを続け、大事故を③マネいた。事故というよりは、人災だ。

私はたまたま、その半年前にバングラデシュを取材で訪れていた。④急激な経済成長で都市の人口がふくれあがり、⑤シンコクな交通渋滞でカオスといっていい状態だった首都ダッカの様子を思い出した。農村部では、「日本の記者が来た」と大騒ぎになり、「自分の話を聞いてほしい」と人々が次々に訴えてきた。工場で働く人たちは、農村部から都市部に働きに来ていた人が多かったという。出会った人たちの顔が思い浮かび、ひとごととは思えなかった。

だが、観光国ではないバングラデシュを訪れたことがある日本人はさほど多くないだろう。この時のニュース映像を見て心を痛めたとしても、安全管理が⑥ないがしろにされる途上国の話で、身近な問題とは感じなかった人も多いのではないだろうか。

だが、私たち先進国に暮らす人間が、関係ないとは言い切れない。

ここで作られていたのは、私たちが着るための服だったからだ。

バングラデシュの人口は約1億6000万人、1人あたりのGDPは1538ドル（2017年度）。アジアの最貧国といわれてきたが、最近はめざましい経済成長を遂げている。それを支えてきたのが縫製業で、先進国向けの既製服の輸出を担っていることから、「世界のアパレル工場」とも呼ばれるようになった。ユニクロ、GAPなど、低価格の衣料品ブランドが生産拠点を置いていた。

先進国向けの服作りを長く⑦ジュチュウしてきた中国に、バングラデシュが対抗するための武器が、人件費の安さだった。産業育成のために、国をあげて「安いからバングラデシュで作って」と呼びかけ、縫製工場ができていった。その中にラナプラザの工場もあった。先進国で、安く、そこそこ質のよい品が手に入るようになった裏では、最低限の安全すら担保されないまま、働いている人たちがいたのだ。

事故をきっかけに、ヨーロッパや米国では、アパレル業界の責任を問い、⑧消費のあり方を見直す機運が高まっていった。日本でも、事故が起きた4月末に「ファッションレボリューションウィーク」が開催され、製造現場について知るためのイベントなどが開かれるようになった。

だが、目に見えた変化を実感できるまでになったかといえば、残念ながらそうとはいえない。一人の消費者として何かやりたいと思っても、一歩踏み出すのはなかなか難しい面もある。自分一人が行動を変えたところで、何かを変えられるという実感も持ちづらい。社会全体にとってよりよい選択をしようにも、あふれる情報の中から、何を、どう選んでいいかよくわからないところもある。

私も、そんな一人だ。

自分一人が行動を変えたところで、何も変わらないのではないか、と無力感を抱いている人もいるかもしれない。だが、とうて

い太刀打ちできなさそうな「巨大企業」も、中に入ってみると普通の人間が働く組織でもある。

新聞記者は、いろんな分野の、いろんな人たちに話を聞きに行くことができる。積み重ねていくうちに、どんなに「強力」に見える組織の人たちも、実は外の声をとても気にしているのだな、と感じるようになった。勢いのあるグローバル企業でも、政治家でも、世論には非常に敏感だ。また、外の声に耳を傾けられる組織でなければ、いずれ勢いは衰えていくものだ。

だから、あきらめずに、企業に対して、消費者としての声を届けてほしい。苦情だけではなく、いいと思ったらその評価を伝えることもとても大切だ。企業にとっては、方向性が間違っていないと認識し、社内で懐疑的な人たちにも広げていく原動力になるからだ。それをＳＮＳで周りの人にも伝えれば、誰かが気づくきっかけになるかもしれない。そういう積み重ねが、実際にいま、じわじわと世界の企業を変え始めている。

大きな⑨ヘンカクの第一歩は、たいてい、気づかれもしないような小さなきっかけから始まっている。ボランティアや社会起業家といった社会貢献の形は、誰もが気軽に、というわけにはなかなかいかないだろう。だが、普段の暮らしの中でも、できることはたくさんある。毎日の暮らしを支える商品がどのように作られ、手元に届いているかについて関心を持つ人が増え、自分の買い物の仕方を変える人が増えれば、企業も、社会も、変わっていく。

【文章Ⅱ】

1年間に10億枚の新品の服が、一度も客の手に渡ることもないまま捨てられているらしい――。

そんな話を耳にしたのは、ＳＤＧｓの企画に関わり始めたころだ。いまとなっては記憶がさだかではないのだが、たまたま見かけたネットの情報だったと思う。

とんでもない数字だ。日本で供給されている服の4枚に1枚は、新品のまま捨てられている計算になる。

日本には、「もったいない」という考え方が根付いている。かつては、限りある資源をできる限り生かし、無駄を出さないように工夫する暮らしが根付いていた。戦後、⑩大量消費の時代を迎え、その循環の仕組みは崩れてきたとはいえ、多くの人は、なるべ

く無駄を減らそう、と心がけて暮らしている。それは、自分の家計のためだけではなく、環境に負荷をかけないように暮らしたい、という思いがあるからだ。⑪「断捨離」という言葉が、流行を超えて定着していったのも、たくさんのものを所有していることが、豊かさや幸せにつながっているとは限らない、という思いを抱える人が少なくないことの現れだ。

誰しも、買った服が似合わなかったり、すぐに流行遅れになったりして、ほとんど着ずに捨ててしまった苦い経験はあるだろう。だが、そもそも商品として消費者の手元に渡ることすらないまま、大量に処分されているとしたら、そうした「無駄」とは全く別の次元の問題だ。

（『大量廃棄社会　アパレルとコンビニの不都合な真実』仲村和代　藤田さつき）

問一　――部①『事故』が起きた」とありますが、その「事故」の原因を説明した次の文の［　］部A・Bに当てはまる言葉を指定した字数で文中からぬき出しなさい。（句読点は字数に入れます。）

ビルが崩壊したのは［A（五字）］が原因ではなく、［B（二字）］によるものである。

問二　――部②・③・⑤・⑦・⑨のカタカナを漢字に直しなさい。

問三　――部④「急激な経済成長」とありますが、バングラデシュがそのように成長した理由を説明した次の文の［　］部A～Cに当てはまる言葉をそれぞれ指定した字数で文中からぬき出しなさい。（句読点は字数に入れます。）

［A（三字）］に向けて［B（十一字）］服をたくさん［C（二字）］するようになったから。

問四　――部⑥「ないがしろにされる」とありますが、「ないがしろにする」の意味を書きなさい。

問五　――部⑧「消費のあり方を見直す」とありますが、次の**ア**～**ウ**の中で筆者が消費者に求めていることとして適当なものに○、適当でないものに×を書きなさい。

ア　普段買う商品が、誰(だれ)によってどのように作られ、運ばれているかを知り、買い物の仕方を変えること。

イ　世の中にあふれる情報の中から、社会をよりよくするための方法について書かれた情報を見ぬくこと。

ウ　商品や企業に対しての消費者としての率直な意見を、ＳＮＳなどを通じて他者や企業に伝えていくこと。

問六　――部⑩「大量消費の時代」とありますが、

(1)　「大量消費の時代」の経済の仕組みとして最も適当なものを、次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　資本主義　**イ**　社会主義　**ウ**　共産主義　**エ**　民主主義

(2)　「大量消費の時代」に先進国が安い服をたくさん買うことができるのは、何によって実現しているのですか。【文章Ⅰ】の内容をもとに三十字以内で書きなさい。（句読点は字数に入れます。）

問七　――部⑪『断捨離』という言葉が、流行を超えて定着していった」とありますが、どのような人が増えていると言えますか。最も適当なものを、次の**ア**～**オ**のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　新品の服が誰にも着られずに捨てられることを無駄だと考える人。

イ　ものを何も所有せずに生きていく方法を考えることができる人。

ウ　自分にとって本当に必要なものが何なのかを考えることができる人。

エ　新商品を次々と買う代わりに古くなったものを捨てようと考える人。

オ　「もったいない」という考え方が正しいのかを考えることができる人。

問八　筆者は消費者と企業のどういった点に課題があると考えていますか。文章全体を読んで、消費者と企業の課題をそれぞれ**二つ**書きなさい。

このページには問題はありません

二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（本文の表記の一部を変えています。）

〈長谷川十和と野口悠はともに小学六年生。小学校は違うが、中学受験のために同じ塾に通っている。〉

しばらくの間、二人してボートに横たわっていた。本当に雪のようだった。青い空から、ピンクの花びらがひらひらと①フってくる。

野口はゆっくり半身を起こし、花びらを全身で受けるように両手を広げて天を仰いだ。十和はその時期のことを知らないけれど、小さい頃はかなり本格的にバレエをやっていたと聞いている。

「ねぇ、志望校決めた？」

十和もつられるように身体を起こして、問いかけた。野口は目をつぶり、手をひらひらさせながら「ううん。決めてない」と、当然のように応じる。

「来週までに②テイシュツしなきゃいけないんだよね？」

「べつにいいんじゃない？　これまでの模試でも一応志望校は書いてたんだし、同じようにテキトーで」

「私、ホントに行きたい学校なんてないんだけど」

「じゃあ、地元の中学行けばいいじゃん」

「野口はあるの？」

「私もないけど」

「でも、地元の学校は行かないんでしょ？」

「まぁ、そうだね」

「なんか、もうさ。私、野口と同じ学校に行こうかなぁ。③セイセキも似たようなものだし、その方が楽しくない？」と、十和が

泣き言のような声をもらしたところで、野口はようやく踊るのをやめて、こちらに目を向けてきた。
十和もその目を見返す。もちろん野口がこういったことを嫌うのは知っているが、想像していた以上にこわい顔をしていた。
「④そういうのはやめようよ」
⑤二人の間を生ぬるい風が吹き抜ける。十和は思わずムッとした。
「なんで？　べつに良くない？」
「イヤだ。それはなんかダサい」
「なんでダサいの？　っていうか、ダサくたってべつにいいじゃん。二人とも行きたい学校なんてないんだし、来年もいっしょにいれたら楽しいじゃん」
自分で言って、ハッとした。そうなのだ。もし同じ学校に行かなければ、九分九厘その可能性はないのだけれど、来年のいまごろは野口と離ればなれになっている。
勉強はちっとも好きじゃないけれど、塾が嫌いと思ったことは一度もない。なのに『S』のマークの入ったバッグを⑥セオって商店街を歩いているだけで、見知らぬおばあちゃんから声をかけられることがある。
「こんなに小さいのにもう塾通い？　かわいそうにね。本当はもっと遊んでいたいのにね」
意味がわからない……とは思わない。ただ、いまだにそんなことを思う人もいるんだなとは感じる。
たとえ学校を休んでも、塾には行く。行けば、野口がいるからだ。いつか野口からもにたようなことを聞いた。
「学校には長谷川がいないからね。長谷川のいる塾の方が楽しいよ。塾に行くのが憂鬱だったことってあんまりない」
あの日は十和の心を満たしてくれることを言ってくれた友人が、どうして同じ中学に行くのをこんなに拒むのかわからない。
「やっぱりわからない。いいじゃん、同じ学校に行こうよ。ムリにでも目標作ったら、二人とも勉強がんばるかもしれないじゃん」
十和は気持ちが弱い方だし、周囲の人の考えていることに敏感だ。みんなが何を思っているか悟ってしまい、傷つくことが少なくない。だからそうなる前に、心にバリアを張るように引き下がることがほとんどだ。

めずらしくしつこく食い下がった十和を、野口は目を細めて見つめている。
「私だって長谷川と同じ学校に行けたら楽しいとは思うよ。でも、やっぱりそれはイヤかな。⑦なんか、突っぱねなきゃいけないことな気がする」
「どうして？」
「うまく説明できないけど、なんとなく。⑧いまの私たちは楽な方に流されちゃいけないっていう気がする」
この話はもう終わりというふうに、野口は注1毅然と首を振った。実は素直なところがあるように、運を引きつけるところがあるように、野口にはこういう頑固で、かつ秘密主義な一面がある。きっと同じように十和を親友と思ってくれているはずなのに、絶対に立ち入らせてくれない⑨リョウイキがある。
いつだったか、野口と同じ御殿山小に通うAクラスの子にいきなり声をかけられたことがある。
「長谷川さんって、野口さんと仲いいの？　あんま近づかない方がいいと思うよ。あの子、学校で悪いウワサ結構あるから」
それまでほとんどしゃべったことのなかった子だ。その子は、⑩自分はいいことを教えてやっているのだと疑っていない様子で、やたらと恩着せがましい表情を浮かべていた。
正直にいえば、イラッとした。もうすでに野口との仲は注2盤石なものだったし、それを他人からとやかく言われる筋合いはない。
でも、⑪そのいらだちをわずかに好奇心が上回った。
「ウワサって？」
その子は勝ちほこった顔をした。
「いろいろあるよ。万引きでつかまったらしいとか、補導されたことがあるみたいだとか、オジサンと腕組んでるとこを見た子がいるとか、ＳＮＳで知り合ったパパがいるらしいとかさ、ホントにいろいろ」
「そうなんだ」

「ね？　ヤバいでしょ？」

あの日のことを思い出すと、いまでも胸が痛くなる。その痛みの出所は、聞いた話の内容ではなく、おそらくは後悔なのだろうと十和は思う。

振り返れば、伝聞につぐ伝聞だった。らしいとか、みたいとか。自分が見たわけでもないのにどうしてそんな無責任なことが言えるのだろう。あんたの方がずっとヤバいよ。そう言い返すこともできたはずだ。

⑫ 十和は何も言うことができなかった。⑬、野口ならそんなこともあるかもしれないと思ってしまった。そう思ってしまったことから来る悔いなのか、⑭言い返すことができなかったこと自体に対してか。

野口とはもちろんＳＮＳでもつながっている。毎日のように塾で顔を合わせているのに、⑮夜な夜なそこでもやり取りしている。

野口のＳＮＳのアイコンは、憎たらしい風貌の太ったネコのキャラクターだ。しかし、いつだったか塾の帰りにちらりと見てしまったスマホの画面には、まったく違うアイコンが表示されていた。

目もとをピースサインで隠した女の子の写真。

それが野口のものであったなんて確信はない。たまたま他人のアカウントを見ていただけだと考える方がシンプルだ。

でも、十和はそれを野口の裏アカととっさに判断した。学校の友人にもそんなウワサのある子はいる。知らないおじさんに服やアクセサリーを買ってもらっている子がいるという話をたまに聞く。野口のお金回りがやけにいいのも気になる。親友だからって、何もかも明かすことなんてあり得ない。だって……。

十和の方にも野口に明かしていない秘密がある。

「ああ、ホントにいい天気。家帰るのダルいなぁ」

野口はあらためてボートに横たわった。十和はその姿をボンヤリと見つめる。結局、よく知らない子のかげ口に興味を示してしまったことを自分は悔いているのだろう。自分が見ている野口がすべてではないかもしれないけれど、少なくとも見えている野口のことは大好きだ。それだけで十分だ。

野口はポツリとつぶやいた。
「私、やっぱりよくわからないんだよね」
「何が？」
「長谷川がどうして家族とうまくいってないのか、全然わからない」
本当に不思議そうに口にして、野口はもう一言つけ加えた。
「あんなにいい家族なのに」
十和はその言葉を聞き流した。
名残惜しむように舞い落ちる桜はやっぱりキレイで、来年の自分はどこで、どんな気持ちでこれを見ているのだろう。
そんなことを想像した。

（『問題。』早見和真）

注1　毅然・・・意志が強く、ものに動じないさま。
注2　盤石・・・しっかりしていて動かないこと。

問一　――部①・②・③・⑥・⑨のカタカナを漢字に直しなさい。

問二　――部④「そういうのはやめようよ」とありますが、「そう」の指す内容を説明した次の文の［　　］部A・Bに当てはまる言葉を、それぞれ指定した字数で文中からぬき出しなさい。（句読点は字数に入れます。）

十和は本当に行きたい学校なんてないし、野口と［A（十五字）］と思うから、［B（十一字）］と考えること。

問三　――部⑤「二人の間を生ぬるい風が吹き抜ける」とありますが、この時の二人に共通する思いとして最も適当なものを、次の**ア**～**オ**のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　はずかしさ　**イ**　あきらめ　**ウ**　不満　**エ**　後悔（こうかい）　**オ**　孤独（こどく）

問四　――部⑦「なんか、突っぱねなきゃいけないことな気がする」、⑧「いまの私たちは楽な方に流されちゃいけないっていう気がする」とありますが、野口は自分たちの中学進学についてどのように決めていくべきだと考えていますか。これを説明した次の文の［　　］部**A**・**B**に当てはまる言葉を、それぞれ指定した字数で書きなさい。（句読点は字数に入れます。）

中学進学は、［**A**（二十字以内）］決めるのではなく、［**B**（十字以内）］決めていかなければならない。

問五　――部⑩「自分はいいことを教えてやっているのだと疑っていない様子」とありますが、同じような様子を表している表現を文中から**二つ**ぬき出しなさい。

問六　――部⑪「そのいらだちをわずかに好奇心が上回った」とありますが、「いらだち」と「好奇心」は具体的にどのような気持ちを表していますか。文中の言葉を使ってそれぞれ二十五字以内で書きなさい。（句読点は字数に入れます。）

問七　［　　］部⑫～⑭に当てはまる言葉を、次の**ア**～**オ**のうちからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

ア　だから　**イ**　でも　**ウ**　また　**エ**　それとも　**オ**　それどころか

問八　――部⑮「夜な夜な」の意味を書きなさい。

問九　═══部「あの日のことを思い出すと、いまでも胸が痛くなる」とありますが、この痛みはどういう気持ちからきた痛みだと十和は思っていますか。文中の言葉を使って六十字以内で書きなさい。（句読点は字数に入れます。）

問十　十和が野口のことをどのように思っているかを説明した次の文の□部に当てはまる言葉を、解答らんに合うように五十字以内で書きなさい。（句読点は字数に入れます。）

十和が同じ中学校に行こうとさそっても断る理由をはっきり言わず、学校で悪いうわさが結構あると言われている野口に対して、□と思っている。

問十一　次の**ア**～**ウ**の中で本文の内容に合うものに○、合わないものに×を書きなさい。

ア　野口は、自分の将来について真剣に考えず、楽しく気楽な方に流されていく生き方には反発している。

イ　十和は野口のことを親友だと思っているが、野口は自分を親友だと思っていないのではと疑っている。

ウ　十和と野口の関係は強く、一緒にいると楽しいが、二人とも相手に明かしていない秘密を持っている。